閉校式式辞

閉校式に当たり、１年前から続くコロナ禍で、関係者の皆さん、卒業生の皆さんに多数集まって戴くことが叶わず、大変残念に思っております。

最初に本校創立からの経緯を説明させて戴きます。

昭和 53 年に冲永荘一先生が帝京育英財団を創られました。これは 愛媛県出身の高校生又は大学生で、学術優秀・品行方正・身体強健でありながら、経済的理由により就学が困難な生徒・学生に対し、奨学援護を行い、社会有用の人材を育成することを目的とする財団で、主に奨学金の給付を行うものです。冲永荘一先生の祖先が長浜の地であったというご縁で、この地への感謝の思いを込め、地元の人材育成事業としてなされました。

さらに冲永荘兵衛先生が、元大洲市長、村上清吉氏の働きかけもあり、故郷の師弟の持てる力をうずもらせることなく発掘して、能力を最大限に発揮させ、よりよき英才を育成する場を作ることを決意され、大洲市出身で松山東高校の校長を退任された松岡覚先生に、現冨士学舎の運営を一任。昭和 55 年に本校が帝京第五高等学校冨士分校として開校された経緯です。

初年度の入学生は 32 名。全員が寝食を共にする寮生で、みんな優秀で気骨のある生徒達でした。盤珪禅師の建立された如法寺を仰ぐこの閑静なる地で過ごした 3 年間がつい先日のことのように思い出されます。当時は今のような冷暖房施設もなく、暑さ寒さに耐えながら、朝の点呼後は冨士山の中腹まで、ジョギング・・・そして朝食をとり、1 日の学校生活の始まりというものでした。

昭和 58 年には冨士中学校が開校し、翌年には女子の入学も認めることとなり、生徒数も少しずつ増えて行きました。平成 4・5 年には全校生徒も 164 名までなりました。その後は徐々に減少に転じ、平成 15 年には二桁となり、法人本部の方々も、広報活動に力を入れていただきましたが、思うような生徒数確保に至らず、地元愛媛県南予の激しい少子高齢化の波に飲み込まれる中、平成 30 年 4 月に帝京冨士中学校及び帝京冨士高等学校の閉校が決定されることとなりました。

誠に残念で、特に同窓生の皆さんには申し訳なく思いますが、本日、令和 3 年 3 月 20 日、41 年の本校の歴史に終止符を打つことと相成りました。

今改めて思い起こしますに、本校は生徒一人一人に大変恵まれており、共に 41 年間を一緒に過ごすことで共に成長させていただきましたことに改めて感謝申し上げたいと思います。

本校は全寮制でスタートし、自宅通学が可能となりました昭和 59 年度以降も大半が寮生という状況が続いています。また、寮直にあたる教員は昼間授業を行っている教員が輪番で当たり、寮での生活指導のみならず、夜間学習も行うという昼夜一貫したもので、この体制をとっている学校は日本中の数ある中でも本校のみであろうと思います。

この体制のお陰で生徒の皆さんと教員との距離感は極めて近く保たれ、本校独自の校風ができあがったものと思います。

また、親元を離れて寮生活をするがゆえに生徒の皆さんの自立心・逞しさは言うまでもなく、遠隔地からの寮生や地元出身の寮生が混和する中で、先輩・後輩の関係がいつの間にか兄弟・姉妹のような思いとなり、本校独自の気質である思いやりや労り、優しさという人間性も育んでくれたものと思います。

このことがある為に本校に思いを寄せる卒業生の皆さんの篤い思いが伝わってくる思いです。創立以来、帝京冨士高等学校を巣立って行かれました卒業生は 900 名を超え、創設者・冲永荘兵衛先生の遺訓である「努力は実力を生み、実力は自信を養い、自信は興味を倍加する」の精神や「力むれば必ず達す」の目標を遺憾なく発揮され、地元はもとより全国各地で社会発展の中心となって活躍されていることは、大変喜ばしく感謝の気持ちで一杯です。

最後に、本校創立の際の郷土愛や感謝の気持ちに満ち、郷土出身者の活躍や郷土の発展を願う先人の思いを、またその思いを有形・無形様々な形で脈々と受け継いでおられる方々の思いを今後も受け止め、本校閉校後も卒業生の皆さんがお互いに助け合い、協力し合うことで、益々日本中で、いや世界中で活躍されることを強く祈念すると共に、今後も続いていく同窓会の益々の発展と結束をお願い致しまして、閉校式の式辞といたします。

令和三年三月二十日

帝京冨士中学校・帝京冨士高等学校

校長　　松満　幹生